

も、基督教徒と呼ばれる事を好まず、タ、ールと呼ばれる事をも好まない」といふてゐる。蒙古人の傲慢な態度を彼等自からの書いたものによつて證明して見るならば、カルピニが定宗から受取つて羅馬法王に齎し歸つた返書の一節には次の言葉が見えて居る。「昊天の氣力により、日の出づる所から日の没する所に至るまで、すべての地は我等に與へられてある。天の命令によるより外、人は何事を爲す事が出来ようか。汝等は誠の心で「我等は君の民となり、我等の力を君に捧げる」といへ。汝自からすべての諸王の先頭に立つて來り、忠勤を誓つて敬事せよ。そうすれば汝等の服屬を認めることにする。もし天の命に従はず我等の命ずる所に逆ふならば、汝等は我等の敵である。返事は以上の通りである。汝等これに背かば如何やうになる事か分らない。神こそは知ろしめす」とまるつきり眼中人なく、氣宇全く天下を呑める有様であつた事を知り得られる。當時蒙古では羅馬法王や歐洲列國の君主の有様はカルピニはじめ歐洲人からも聞き、また歐洲征伐によつても見聞してよく知つて居つたのであるが、それに對してかゝる返事を與へて居るのである。況んやその餘の小君主や小諸國に對して彼等が如何にこれを輕侮して居つたかは想像に餘りある次第である。

畢竟彼等の經驗によると、如何なる文明も如何なる民族も、彼等の武力の前には屈せざるを得なかつたし武力で屈服させれば如何なる民族にも、如何なる文明にも、みな思ふまゝの用を爲さしめることを得たのだから、彼等がかゝる武力を有する蒙古人としての自負心に充ち他を無視する倨傲の態度を持したのも當然ともいひ得られよう。かゝる次第であるから元朝の蒙古人が特に何れの文明に對しても大して尊敬を拂はず、これに同化される如き態度をとらず亡國の支那の文明の如きに對しても同様の態度をとつたに外ならぬと考へる。即ち前に述べたところと共